

夏目漱石『こころ』論

—家制度から脱出するKの行動分析—

台湾大学 鄭子焜

『こころ』は『朝日新聞』に大正三年の四月二十日から八月十一日まで連載された夏目漱石の代表作である。夏目漱石文学にとって、『こころ』は激動する明治時代を背景に、その時代に生きる知識人が抱えていた葛藤を通じて、明治精神という矛盾を孕む価値観が描かれた小説である。しかしながら、明治三十年ごろ大流行した家庭小説風潮に乗った漱石は、『こころ』を家族小説として書き続けられたことから、インテリ人物の精神苦境の背後には、明治社会に浸透された家制度の存在が示唆されている。

当然ながら、これまでの『こころ』に関する先行研究は幅広い分野で展開されていて、主にエゴ論と善悪論に絞り、「先生」という人物の心理活動に注目し、個人の孤独と時代の矛盾を解明した考察が多く見られる。特に作者漱石と同じく「養子」の身分を持つ「K」という重要人物に関する研究は、その殆どは利己主義や宗教性関連の死因究明が主である。しかしながら、同じく漱石の著作である『行人』や『それから』とは異なり、「家制度」の視点からの『こころ』の人物分析はまだ少ない。その故に、「家制度」の視点から「K」の行動や心理活動をより詳細に考察すべきである。

それゆえ、本発表では、『こころ』の物語におけるKの二つの家庭像に注目し、彼の個人的な成長と家庭環境との相互作用について深く探る。そして、時代背景に合わせて、故郷を離れ、東京へ来るKの行動に焦点を絞り、その背後に隠された葛藤を究明する。それらの考察によって家から脱出したKの行動の意味を明らかになる。